

演題番号：A10

## 慢性経過をたどった脊髄硬膜外膿瘍の猫の1例

○三木伸悟，山下今日子，岡本芽衣，岩永優斗，真下忠久

舞鶴動物医療センター

1. はじめに：脊髄硬膜外膿瘍は脊柱管内の硬膜外に膿瘍を形成する疾患であり、犬や猫で稀に報告されている。本疾患において良好な神経学的予後を得るためには早期診断および治療が重要と考えられているが、神経障害が長期間持続した症例の報告は少ない。今回、脊髄硬膜外膿瘍に罹患し慢性経過をたどった猫に対して減圧術および抗生物質の投与を行ったところ良好な転帰を得られたので、その概要を報告する。

2. 材料および方法：症例は雑種猫、未去勢雄、1歳。11か月前から断続的な背部痛を訴え、さらに2か月前に後肢麻痺および排尿障害を発症した。近医にてプレドニゾロンを用いた内科療法を行うが、症状が改善しなかったため当院を紹介受診した。

3. 結果：初診時、両後肢の筋萎縮および膀胱の拡張を認めた。神経学的検査では両後肢の完全麻痺および脊髄反射の亢進を認めたため、T3-L3脊髄分節における病変を疑った。CT検査ではT11レベルからL1レベルにかけて、脊柱管内右背側域に低吸収で辺縁が造影増強される構造を認め、脊髄を左腹側に圧排していた。さらに脊髄の圧排が最も重度であったT13において、脊柱管が全周性に拡大していた。症例の年齢

および画像所見から脊髄硬膜外膿瘍を疑い、翌日に片側椎弓切除術を実施した。脊柱管内には被膜に包まれた状態で多量の膿が貯留し、髄膜は不整に肥厚していた。症例は術後3日目に退院し、その後は2週間間隔で3回セフォキシム(8 mg/kg)の皮下投与を行った。術後10日目には後肢の歩行機能および排尿機能が回復し、後肢の運動機能はその後回復を続けた。

4. 考察および結語：脊髄硬膜外膿瘍は治療が遅れた場合、不可逆的な神経障害や敗血症など重篤な合併症を生じうる。本症例は後肢の筋萎縮や脊柱管の拡大を認めたことから慢性経過をたどったことが示唆され、それにも関わらず治療に良好な反応を示した。過去の報告でも、本疾患に罹患し後肢の完全麻痺が1か月以上持続した猫が減圧術および抗生物質の投与に良好に反応したとされている。したがって猫の脊髄硬膜外膿瘍は治療の遅れが必ずしも予後の悪化に結びつかないと考えられる。しかしながら最良の治療成績を得るためには、進行性の脊髄障害を呈する症例において本疾患を鑑別疾患に含め、早期診断および治療を行うことが望ましい。